



### 第13号：平成27年5月21日 尾形光琳 —— 3

町衆のお稽古事について触れた。京都には、この稽古事が現在でも引き継がれる。謡もその一つである。これは今日の言葉で云えば音楽になる。今では音楽とはほど遠いものになっているが、光琳が生きた頃はまさに謡が音楽そのものであった。

光琳は江戸に下り、酒井家に武家奉公をした。無論、侍ではなく絵師としての奉公であるが、気づまりな生活であったようだ。早く京へ戻りたいと絵の弟子に漏らしている。相当ストレスが溜まっていたと想像される。ストレス解消に、親友の中村内蔵助が協力し、将軍家お抱えの申樂師・宝生大夫の舞を見せている。弟子への手紙に宝生の舞が「中々面白キ事／言語ニ絶候」と記している。この僅かな文言から、とやかく云うことは真まねばならないだろうが、「面白キ」の語が気になる。宝生の舞が面白かったに相違ないが、面白いことの意味内容を想像すると、光琳の姿が見えてくる。光琳は将軍さんのお好みを読み取ったのではないだろうか。

菊を描く本図の背後にお能の「菊慈童」を想起してみたい。光琳が菊を描くとき、気持ち中で無意識に謡のリズムを執っていたのではないか。それは名品・杜若図屏風に展開した杜若の花々のリズム感にも通じ、屏風の中から音楽が聞こえる。

